



1年生住宅課題の講評会の様子

小さな試みと検証の繰り返しが見据えるその先

4年目の教育支援活動

JIA 三重の、三重県内の学校に対する教育支援活動も4年目となる。2019年度は、昨年に引き続き、会員でもある三重短期大学教授の木下先生の協力のもと、住居環境コース1年生の住宅課題でエスキース・最終講評会の2回の出前授業と、2年生の卒業設計中間発表の講評会に参加した。3回の出前授業の会員参加は延べ12名であった。

三重短大への協力は3回目となるが、1年生の住宅課題に関しては過去2回の授業協力の中から見えてきた改善点をメンバーで話し合い、木下先生へ提案させて頂くことにした。それは大きく2点。一つは敷地を変えること。もう一つはスタディ方法を変えることだった。

これまでの検証から

これまでの敷地は、旧伊勢街道に面しているものの周囲に街道らしさは残っておらず、初めて実際の敷地で設計を行う学生にとっては、敷地を読み取る力を養うことが難しいのではとの意見が出た。そこで、学校周辺を歩き回り特徴ある敷地をいくつかリストアップし、木下先生と打合せの結果、田園風景が広がる住宅地と田園部の境界地を選んだ。



敷地周辺写真

次に、エスキースに求める検討案の縮尺を1/50→1/100とした。これまでは1つの案を考えるだけで時間がかかり、複数案の検討まで行きつかない現状があったからだ。そしてエスキースチェックに加えて、上記2点を伝えることを意識したショートレクチャーを開催することで意図を明確化。授

業終了後に学生にはアンケートに協力してもらい、建築を学び始めて間もない学生に設定した敷地や手法がうまく学生に意図が伝わっているか確認を行った。

学生の意見の集約

「あなたはこの課題を通じて、設定された敷地や敷地周辺の特性を考慮して設計することの大切さを学びましたか?」という質問に対する回答は、33人中「はい」30人・「どちらでもない」3人・「いいえ」0人であった。9割ほどの学生が理解してもらえたといううれしい結果となった。

次に「前問で「はい」と答えた方へ、なぜそう思いましたか?また実際にどのような形でそのことを計画に反映できましたか?」という問いに対して、下記の回答があった。



アンケート

＜敷地を手掛かりに設計を進めることへの理解を深めた感想＞

「方角・景観・道路など敷地の特性を考慮することで、よりその景観にあった建物をつくるのが出来ると思った」「設計する上で敷地を見に行くことはイメージをふくらませるために重要だと思った」

＜敷地を考えることからより具体的に環境や暮らしのことを考えた感想＞

「風が強い場所だと感じたので屋根をアーチ型にし、風を逃がし抵抗を少なくするデザインとした」「敷地にあった家を建てるのが、その家での暮らしやすさに繋がると思った」

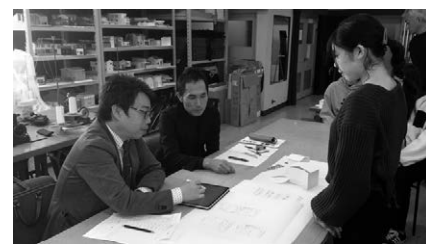
その他、「他の人の作品を見て、私は景色を全然いかせていないと痛感した」という意見や「敷地や周辺環境を考慮し家を考

えることで、実際の仕事と同じようなことができたのかなと思った」学生も。

また、「あなたはこの課題を進める上で、エスキース段階で1/100のスケールで複数案の作成を試みましたが?」という質問に対する回答は、33人中「はい」23人・「いいえ」10人であった。7割ほどの学生が試みたというまずまずの結果となった。

教育支援活動の先に見据えるもの

アンケートの結果から、学生たちの場所や敷地への意識の高まりにほっと安心すると共に、仕事へのリアリティを感じてくれた様子でうれしかった。ただエスキースの手法は、もう少しレクチャーで落とし込みが必要だったと感じた。また今年からの試みとして、2年生卒業設計の中間発表の講評会にも参加協力し、現在その学生たちに卒業設計の発表の場を提供できないかと検討を進めている。地方で建築を学ぶ学生や若者に、さまざまな機会を与えることができればと思っている。その一方で、限られた人・時間・予算で活動する地域会。大学・学生・会員にとっても意義あるこの活動が、継続的に行われうまく循環する仕組みづくり(例えば業務と認められるなど)を授業の充実と同時に考える時期にきているのではないだろうか。このような小さな試みと検証の繰り返し、学生に建築の魅力を伝えるだけでなく、地域会の活力を生む萌芽になることを祈っている。



2年生卒業設計中間発表の様子



森本 雅史 (JIA 三重)

森本建築事務所